

# 模擬授業を通して学ぶ国語の指導技術

## Teaching Skills and Abilities of Japanese Language Obtained Through Trial Lessons

大谷伊都子  
OTANI Itsuko

### 【要旨】

筆者の「国語科教育法」の授業では、受講生全員が模擬授業を行ない、授業後は、生徒役の受講生に、授業についてのコメントや感想（板書・話し方・内容など）を書いてもらう。模擬授業担当者本人が気づかない問題点を他の受講生に指摘してもらうことで、受講生自身の授業改善に役立てるためである。本稿では、「板書」「話し方」「内容」「教師の発問」の各観点から、受講生が書いた模擬授業についてのコメントを紹介し、授業を行なう際に授業担当者はどのようなことに気をつけなければならないかを考察した。学生ならではの視点からの指摘で、我々教師にとっても気づかされることや学ぶべきことが多くあった。

### はじめに

本学では、中学校・高等学校の「国語」免許状取得のために教職課程を履修している場合、3年生は、「国語科教育法Ⅰ」（前期）・「国語科教育法Ⅱ」（後期）が必修科目となっており、筆者は2015年度からこの科目を担当している。

授業では、4年次の教育実習に向けて、講義だけではなく、教材を決めて受講生全員が模擬授業も行なう。学生が模擬授業を行なった後は、生徒役の受講生に、自分が受けた授業についてのコメントや感想（板書・話し方・内容など）を書いてもらう。そして、回収して筆者が目を通した後、模擬授業を行なった学生本人にも渡すことにしている。模擬授業をする中で自分では気づかない問題点を他の受講生に指摘してもらうことで、受講生自身の授業改善に役立てていければと考えている。また、模擬授業を実施した本人には、自分の授業を振り返っての反省点を書いてもらう。このようにして提出されたコメントを読むと、授業をしていく上で、どのような点に気をつけなければならないかということが明示的に浮かびあがってくる。授業に慣れた教師が当然行なっていることであっても、授業実施経験のない受講生にはそうではないことも多々発見される。また、教師にとっても新たな発見や改善点が見つかり、自身の授業に役立てられる。

本稿では、受講生が書いた模擬授業についてのコメント（以下文中では  で囲んで示す）を紹介し、授業を行なう際に授業担当者（本稿では「模擬授業を担当する学生」を指す）はどのようなことに気をつけなければならないかを考えていきたい。なお、模擬授業には『新編国語総合』（東京書籍 平

成 26 年 2 月発行 高等学校国語科用) を使用した。文中に出てくる教材は、この教科書による。

## 1 板書

### (1) 表記、見やすさ

- ・誤字・脱字がある。
- ・漢字を略して書いている。
- ・筆順が間違っている。
- ・文字が雑で読みにくい。
- ・文字どうしが詰まりすぎていて見にくい。
- ・ひとまとまりの語句や文の中の文字の大きさにばらつきがあり、読みにくい。

板書の文字は、楷書で正確に丁寧を書く。誤字・脱字のないよう気をつける。ボールペンやシャープペンシルを使った普段の筆記とは運筆の勝手が違い、さらに、黒板は全体が見えにくく近視眼的になるので、ノートなどに書く時より誤字・脱字が多くなりがちである。学習者が写している間に、授業担当者も板書を読み直す習慣をつけるとよい。

また、学習者は教師が板書するのを常に目にしているので、正しい筆順を心がける。昨今の学生は筆順に無頓着で、驚くような筆順で書く者もまま見受けられる。

(例)・平仮名の「ら」の最初の点を、最後にうつ。

- ・「国」という漢字の、国構えの中の「玉」を最初に書き、後から国構えを書く。

間違った筆順を身につけてしまうと、矯正するのはなかなかむずかしい。学生には、教育実習に備え普段から筆順を意識して書くよう指導したい。

文字どうしが詰まりすぎていると見にくいので、適度な字間を取る。また、文字の大きさにばらつきがあると読みにくい。文字を一定のサイズに統一することも大切である。その場合、画数の多い漢字はどうしても大きくなりがちなので、漢字は小さめに、かなは大きめに書くとよい。一方で、見出しの字は大きく、説明の字は少し小さくなど、項目によって文字サイズに違いをつけるとわかりやすくなる。

- ・行間が詰まりすぎて見にくい。
- ・行がまっすぐになっていない。
- ・行頭がそろわず、でこぼこになって見苦しい。
- ・項目が変わっても行頭がすべて同じ高さになっていて、わかりにくい。

慣れないうちは、黒板に縦書きでまっすぐに書くのがむずかしいが、練習を重ねるとうまく書けるようになる。また、隣の行との間が詰まりすぎていて見にくくなっていることがよくある。間近で自分が書いているとわかりにくいので、時々教壇から少し離れて学習者の位置に立ってみるとよい。

板書は、1行に書ける文字数が少ないので、黒板全面を使っても案外少ない分量しか書けない。慣れないうちは、予定していた内容が黒板一面で書ききれず、板書計画どおりにいかなくなってしまうことも多い。授業担当者には、授業の準備として、板書案も事前に作成してもらおう。その場合には、授業で使用する黒板1行に書ける文字数と、黒板の端から端まで使うと何行書けるのかをあらかじめ確認した上で、文字数や行数も実際に黒板に書くとおりに板書案を作るよう指導している。

板書には長々とした文を書くことはできるだけ避け、表現をシンプルに、文でなく箇条書きに短くまとめるほうがわかりやすい。文が数行にわたる場合は改行する箇所にも気を配り、文節の切れ目で改行するよう心がける。見た時に読みやすく瞬時に理解しやすい。

一文が数行にわたる場合の行頭、同じ項目の行頭などはそろえるようにする。一方、項目によって行頭に高低をつけ、区別することも大切である。(例えば、登場人物について板書する時、各登場人物名は同じ高さに揃えて書き、各人物の説明は、人物名より行頭を少し下げて記述する、など。)

カラーチョークやカラーマーカーを使い分けて、一目で大事な部分がわかるよう工夫する。

## (2) 板書の内容

- ・教科書から抜粋しているのに、文言が教科書と異なっている。
- ・本文のどこから抜粋しているのかわかりにくい。抜粋する時は、ページ数・行数を入れてほしい。
- ・段落分けをする時「〇ページ〇行目まで」だけだと、わかりにくいし間違えてしまうことがある。本文の該当箇所も引用し「～。」とするほうがわかりやすい。
- ・本来の板書を書いた続きにワークシートの解答を書いていくと、両者が混じって混乱してしまう。
- ・ワークシートのプリントの穴埋め問題の答えを板書する際、数が多いのでどれがどの答えかわからなくなる。

教科書の本文から抜粋して板書する際のコメントが多かった。まず、抜粋しているのに本文の文言と板書の文言が異なっていると、学習者は混乱する。本文中から抜粋する時は単語や文字の表記まで正確に写す。ほぼ同じなのに一部単語が異なっていると、本文は平仮名なのに板書は漢字というような食い違いのないようにする。たとえば、「女主人が思わず「あ」と漏らしたのはなぜ？」という学生の板書だが、教科書の本文は「……それを玄関に出迎えて、思わず、あ、と驚きの声をもらってしまった。」(「とんかつ」三浦哲郎)である。板書するなら、「女主人が「思わず、あ、と驚きの声をもらってしまった」のはなぜ？」とすべきだろう。

また、抜粋箇所が本文のどこなのかわかりにくいので、抜粋する時は、ページ数・行数を入れ、複数行にわたる時は、「56 ページ 9 行～11 行」など終わりの行まで書くようにする。さらに、段落分けの箇所を板書する場合は、「○ページ○行目まで」だけでなく、例えば「～と丁寧に頭を下げた。」といったように、本文の該当箇所も引用するほうがよい。

模擬授業では、授業担当者に補助教材としてワークシートを作成してもらい、それを使った授業も行ったが、その解答を板書する際の要望もあった。本来の板書を書いた続きにワークシートの解答を書いていくと、両者が混じってわかりにくくなるので、そうならないよう書き方を工夫する必要がある。同じく、ワークシートの穴埋め問題の解答を板書する際、数が多いとどれがどの答えかわからなくなる。ワークシートの各空欄に番号などをうち、板書にもその番号と解答を書く。基本的なことだが、初めてワークシートを作る時にはそのようなことにも気づかないものである。

板書する事項に、一貫性を持たせることも大切である。同じ流れの中のことなのに、板書したりしなかったりするようなことは避ける。たとえば、抜粋箇所のページ数・行数を書いているところと書いていないところがあったり、各段落の要旨をまとめる際に、一段落目の要旨は板書したのに二段落目の要旨は板書しなかったり、といったことがないようにする。

授業担当者には、その日の授業の板書案を事前に提出してもらっているが、本番の授業で、板書する内容を当初の板書案とは変更することがある。その時の授業の流れなどによるのだろうが、一部だけ変更することでその後の板書内容との間に齟齬が生じたり、同じような内容を二度書いてしまったりと、板書内容全体としての統一性がなくなってしまい改悪されることのほうが多い。模擬授業の段階では、事前の板書計画をしっかり考え、授業では計画どおりに板書するようにする。もちろん、学習者の発言などを取り入れて板書していく時は、臨機応変に対応していくことが望まれる。

板書はメモではない。授業後にノートを見直した時に、その日の授業内容の全貌や学習の流れが把握できるような板書を心がける。板書したことを「写しても写さなくてもいいよ」というと、当然のことながら写さない者が出てくるし、真面目な学習者はどうすればいいのか不安になる。必要不可欠なことを板書し、板書した内容は必ず写すよう指導する。

## 2 話し方

- ・自分でしゃべっていることに自信がないと、声が小さくなる。
- ・話すスピードが早い。
- ・たたみかけるようにしゃべられるとせわしい。
- ・言い間違いや言い直しが多く、どれが正しいのかわからなくなってしまう。
- ・ことばにつまって黙ってしまい、沈黙の時間が長くなると学習者は不安になる。
- ・しゃべりながら笑うのはやめてほしい。ことばが不鮮明になる。
- ・終始下や黒板に視線を向けて話し、学習者のほうを見ていない。

話し方の基本は、まず声の大きさ・明瞭さ・スピードの3点である。教室の最後尾にいる学習者にまで届く声の大きさが基本だが、通常はしっかり声を出せていても、しゃべっている内容に確信や自信がないところにくると声が小さくなりがちである。また、板書しながら話すと、後ろ向きなので声が届きにくい。板書が終わってから話すようにする。

次に、話すスピードだが、常に立て板に水の如くしゃべり続けると、聞いているほうは注意力が持続できず疲れてしまい、ついていけなくなる。緩急のメリハリが大切である。特に大事なところや発問は少しゆっくり大きな声で話すよう心がける。一文が終わった後、次の文までの間が短くたたみかけるようなしゃべり方をする癖のある者は、一呼吸置き、間をとるよう意識して話す。

言い間違いが多いと、あとで訂正して言い直しても学習者は混乱する。言い間違いをしないよう一言一言確認しながら落ち着いてしゃべる。自信がない時や間違っただけを言った時に笑って曖昧にその場を濁そうとするのは禁物である。

時には、頭の中が真っ白になり、ことばにつまって沈黙してしまうこともある。そういう時に天を仰いだり顔を手で覆ったりいろいろなしぐさが出てしまうが、無理せず、素直に「何をしゃべるか忘れてしまいました」と認めてしまうほうがよい。学習者も寛大な心で見守ってくれるはずである。

最後に、教師は常に教室全体に目を配り学習一人一人の表情や反応を見て、みんなが授業についてきているかどうか確認しながら進めていかなければならない。眠そうにしている者・携帯電話をさわったり内職をしたりしている者に注意をし、顔を上げない者には「はい、鉛筆を置いて前を見よう」などの声かけも必要である。しかし、模擬授業では、自分の授業を進めていくのに精一杯で、学習者の反応や態度にまで注意を向ける余裕のない授業担当者や、恥ずかしくて学習者に目を向けられず、終始視線を下や黒板に向けたままの授業担当者も見受けられる。場数を踏んで徐々に慣れていくしかないが、シャイな教師には、また別のよさもある。シャイな学習者の気持ちが理解できるし、学習者もそういう教師に対するほうが緊張せずリラックスして授業に臨める場合もあるだろう。

### 3 内容

#### (1) 本文の音読

- ・教科書に振り仮名がふってあるのに、教師がそれと違った読み方をしている。
- ・本文を音読させる時、学習者が間違っただけを言った時に笑って曖昧にその場を濁そうとするのは禁物である。

指名して読んでもらう前に、教師が本文を範読する場合は、当然のことだが読み間違いをしないよう正確に読む。特に古文などで間違えやすい読みやむずかしい読みは、その都度学習者といっしょに確認しながら読み進めるとよい。教科書に振り仮名がふってあるのに、教師がそれと違った読み方をすると、学習者はどちらが正しいのだろうと混乱してしまう。教科書どおりに読むのが鉄則である。学習者に本文を音読させていて間違った読み方をした場合は、その場で訂正し、クラス全体に正しい読み方を周知させる。

指名して音読していく場合は、一人にあまり長い時間読ませるのではなく、短めにして多くの人に回していくほうが、新鮮さが持続してよい。また、指名の順も、座席順や名簿順など次に当たる人が予想できるやり方ばかりでなく、時にはランダムに指名すると、学習者の緊張感が保てるだろう。

## (2) 本文の解説・古文の解釈など

- ・ 作品の著者についても解説してほしい。
- ・ 古文の場合、細かな現代語訳に入る前に、まず全体の大ざっぱな説明がほしい。
- ・ 和歌の現代語訳は、口頭だけではわかりにくかった。板書してほしい。
- ・ 和歌の現代語訳は学習者にさせるのはむずかしい。
- ・ 古文で、学習者が間違った訳をした時は、なぜ間違っているのかを説明してほしい。

本文の内容に入る前に、まず著者や作品について簡単な解説をする。著者については、氏名が難しい漢字の場合もあるので、氏名の読み方や漢字から始まり、著者の略歴なども紹介する。教科書には本文末尾に著者についての説明が掲載されているので、参考にしながら、教科書には書かれていない著者のエピソードなどを交えると学習者は親近感を持つ。

古文の場合は、著者の紹介だけでなく、「随筆文」「紀行文」「歌物語」など作品ジャンルの説明や作品の書かれた時代背景にまで触れるとよいだろう。模擬授業を行なった学生の中には、「日本史をきちんと学んできていないので、『平安時代』『鎌倉時代』などと言われてもピンとこない」と言う者もあった。そういう学習者もいるかもしれないということを教師として意識しておく必要がある。

本文中に出てくる地名や事物などについても、時間が許せば触れるようにする。たとえば、「とんかつ」(三浦哲郎)で、「青森」「福井」といった県名が出てきた時には、黒板に簡単な日本地図を書きそれぞれの県を確認することで(地図上でどこにあるかわからない者もいる)両地の距離感がわかるし、「東尋坊」や「永平寺」の写真を見せることでどんなところなのかイメージがつかみやすくなる。「手技に学ぶ」(前田英樹)では「かな」「のみ」「のこぎり」など工具が出てきたが、昨今は実物を見たことのない子供も多いので、実物や写真を持ってきて見せるのもよいだろう。知らないものやことがらを、映像に頼らずに想像することも大切だが、「百聞は一見に如かず」という面があることも確かだ。

また、本文の内容に関連した雑学的知識やエピソードなどを授業の合間に盛り込んで披露すると、学習者も興味を持つだろう。

古文の場合、いきなり細かい現代語訳を頭からやっていくのではなく、まず通読して全体の流れを大ざっぱにつかませることが大切である。主人公や登場人物について確認する、会話の部分なら誰のせりふなのかを考える、など、原文を理解する上で必要な情報を事前に教室の中で共有したい。その後、主要な語句の意味について押さえ、教科書の脚注や一部書かれている訳文などを参考にしながら現代語訳に入っていく。細かなところまで正確に訳するためには、古典文法をしっかりと押さえておかなければならない。高等学校で文法的なことをどの程度まで教えるかは高校のレベルや生徒の学力によっても異なってくる。いずれにしろ、1年生の段階ですべての古典文法事項をマスターすることはむずかしいので、現代語訳をする上で必要となる文法事項、たとえば助動詞などは、その都度触れながら説明する。

(例)「奥山に、猫またといふものありて、人を食らふなる。」(「徒然草」第八十九段)

・「なる」は伝聞推定の「なり」なので、「食うそうだ」という訳になる。

(例)「今日はそのことをなさんと思へど、」(「徒然草」第百八十九段)

・助動詞「ん(む)」にはいくつかの意味があるが、ここでは意志を表すから、「～しよう」という訳になる。

むずかしいからといって曖昧に濁してしまわず、学習者が間違った現代語訳をした時には、なぜ間違っているのか理由を説明し、教師が正しい訳を教えるようにする。昨今は高校で古典文法を体系的に学ばないまま大学に来ている学生もいるので、教材として古典を用いる際には、模擬授業を行なう学生自身が古典文法についてもう一度復習しておく必要がある。

学生のコメントにもあったが、和歌に限らず、現代語訳は、教師が口頭で述べ、それを学習者が聞き取って筆記するのはむずかしい。手間はかかるが板書するか、事前に一部記入されたワークシートなどを使って全員が正しく把握できるようにする。

### (3) ワークシート

- ・ワークシートなど配付プリントに、誤字・脱字が多い。
- ・ワークシートの古文の表記が、教科書本文の表記と異なっている。
- ・ワークシートで、記入する空欄のスペースが狭くて必要なことが書き込めない。

教師が作成したワークシートなどの配付プリントは、誤字・脱字や表記ミスがないよう細心の注意を払い、事前にチェックする。それでも配付後にミスが見つかった時には、口頭で訂正するだけでなく、訂正箇所は板書する。

既に記入された古文の横に、対応する現代語訳を書き込ませるワークシートでは、古文は使用してい

る教科書どおり正確に書き写しておくようにする。古典作品には本文異同があり、仮名づかいなども使用するテキストによって異なるので、そういったところが自分の教科書と異なっていると、学習者はどれが正しいのかわからなくなり混乱するからである。また、配付物の中で使われている用語と、口頭説明で使う用語が異なっているのも問題である。このことに限らず、教師は、同じものやことごとについて言及する場合、使用する用語を統一するようにする。たとえば、「徒然草」の授業をしていた時、生徒役の学生から「一まとまりの話は、『段』というのか、それとも、『章段』というのか」という質問が出た。授業担当者が、無意識に両方の用語を使っていたのでこのような疑問が出たのである。

ワークシートで、現代語訳などを書き込ませる空欄は、余裕をもって大きめに空けるようにしたい。また、教師が先に現代語訳を書き込んでいる箇所は説明を省きがちであるが、音読させたり語句の説明をしたり内容を要約したりして、クラス全体で再確認したほうがよい。

#### (4) 時間配分など

事前に指導案を作っても、予定どおりに進まないことはままある。授業担当者は、残り時間が少なくなってくると焦りがちになる。大切な部分を端折ってしまい、あらかじめ考えていた授業の組み立てがくずれると、学習者にとってもわかりにくい消化不良の内容になってしまう。予定通り行けそうにない時は、どの部分を割愛するのか、宿題にして考えてきてもらうのか、次時に回すのかなど、残り時間をにらみながら頭の中で計画を立て直さなければならない。

逆に、予定より早く進んで時間が余りそうな時もある。授業担当者はこちらの場合のほうが困るようで、50分授業なのに40分くらいが過ぎたところで、「もう今日予定していたことは全部終わりました。しゃべることありません……」と途方にくれてしまう。時間に余裕ができた場合に行なう発問、内容と関連した雑談やエピソードなどを常にいくつか用意しておくようにする。あるいは、次時に行なう授業を先取りして少し話したり、それと関連して宿題を出しておいたりすることもできよう。

#### 4 教師の発問

- ・教師の一方的な説明が長いので、もっと発問を増やした方がいい。
- ・説明していたと思ったらいつの間にか発問になっていて、急に指名されたので焦った。
- ・指名された学習者の発言や回答が聞き取りにくいことがあるので、教師がもう一度大きな声でクラス全体にリピートしてほしい。
- ・学習者が発言している途中でつまったりした時、助け船を出そうと教員が口を挟んでくるのは、悪意はないのだろうがやめたほうがいい。

授業をすることに慣れていない授業担当者は発問をする余裕がなく、自分が説明・解説することが中心になりがちである。しかし、それでは生徒の集中力が持続しないし、自分で考えることをしなくなってしまう。適宜発問を挟むことで緊張感が生まれる。

学生のコメントにもあったが、説明から発問へ移る時の流れがスムーズすぎると、いつの間に発問になったのかわかりにくいことがある。「これから質問しますよ」ということが学習者にわかるよう、説明と発問のあいだにメリハリをつける。

発問は一回だけにするか、あるいは、何回か繰り返すほうがよいか。確かに一度だけでは、うっかりしていて聞き逃す者もいるから発問を繰り返すほうが親切ではあろう。しかし、聞いていなくても「尋ねれば先生が教えてくれる」となると、学習者は教師の発言をきちんと聞こうとしなくなる。実際授業中に、発問して指名すると、居眠りしていたわけでもないのに、「何ですか？ もう一度言って下さい」と質問の内容を問い返す者がいる。教師の発問を聞いていない学習者のほうに非があるのだが、そういう者に「一度しか言わないから、人の話はしっかり聞きなさい」と注意したところで、なかなか聞くようになるものではない。このような学習者も置き去りにせず擲り上げていこうとすれば、同じ発問を繰り返すことになる。その際に気をつけなければならないのは、発問の表現や言い回しは一貫して同じ文言にするということである。言う度に内容が少しずつ変わっていくことのないようにする。

発問に対する指名の方法であるが、「わかる人？」「わかりますか」といった問いかけに対して、挙手したり、指名を待たず自発的に発言したりする学習者は限られている。クラスの中に何人かそういう活発な学習者がいると、教師はつい彼らに頼りがちになってしまうが、それでは声を発しない多くの学習者たちが置き去りになる恐れがある。ランダム指名や順次指名していく時もあったほうがよいだろう。授業担当者の中には、先に指名してから発問する者があるが、そうすると当てられなかった他の学習者は考えなくなってしまう。まず全員に向かって発問し、みんなに考えさせてから指名する。

学生のコメントに「指名した学習者の声が小さくて発言が聞き取りにくい」というものがあった。こういう場合、教師がその発言内容をもう一度リピートし、クラスの全員に徹底させることは、授業を受けている学習者にとってはありがたい。しかし、これも前述の教師の発問と同様、繰り返し言うのが常になると、学習者は「どうせ先生がもう一度言ってくれるから」と他人の発言を真剣に聞こうとしなくなる。また、もし教師がリピートするなら、学習者の発言を正確に伝える必要があるが、教師は授業が進めやすいように発言の文言を無意識に言い替えてしまいがちである。学習者の発言は、できる限り他の学習者が直接聞き取るようにするのが望ましい。声が小さければ、「後ろの人にも聞こえるようにもう少し大きな声でね」と言って、本人に繰り返させるのも一つの方法だろう。

また、学習者が発言している途中で言いよどんだりつまったりした時も、教師はすぐに口を挟むのではなく、その発言が最後まで終わるのをできるだけ待つよう心がける。学習者の様子を見ながら、助け船を出したほうがいいのかどうかを見極める。あるいは、よく考えもせずいつも「わかりません」と言ってその場を逃れようとする者もいる。いずれの場合も、すぐに別の人を再指名するのではなく、ヒントを与えたり、違う角度から質問してみたりして、指名した学習者が多少なりとも答えられるよう導いて

いくことは、今後のその学習者の自信にもつながっていく。

時には、答えが一つに決まらない質問を出し、学習者からいろいろな意見を聞いてその中から答えを導いていくというやり方もあってよい。ただ、これをやってうまくまとめていくには教師にかなりの力量が必要となる。

おわりに

さて、ここまで、模擬授業に参加した学生からのコメントをもとに、授業を行なうにあたっての留意点をまとめてきた。学生ならではの視点からの指摘で、我々教師にとっても気づかされることや学ぶべきことも多々あった。

たとえば、学習者への対応で最もむずかしいのが、学習者の発言した答えが間違っていたり、こちらの求めるものと違っていたりする場合である。多くの学生が、生徒役として指名された時、教師役の学生の対応の良さについてコメントしていた。

- ・指名されて答えている時、顔を見ながらウンウンとうなずいてくれるので、話しやすかった。
- ・現代語訳が少し違っていても、「大丈夫だよ」と声をかけてくれたのがとてもよかった。
- ・つまった時や発言した答えが間違っていた時に、一言声をかけてくれるのが本当にいい。
- ・間違った答えを言っても、「そうだね」と取りあえず受け入れてくれるのでうれしい。

自分の言った答えが間違っていた時の恥ずかしさや気まずさは、教師が想像する以上に大きく（誰しもかつては自分が生徒や学生だったはずだが、長年教師をしていると、授業を受けている側の立場に身を置いてみることをしなくなるものである）、間違った答えを言うくらいなら、最初から「わかりません」と言って答えることを放棄するほうがダメージを受けないのである。学生たちは学習者のそんな気持ちがよくわかっているので、そういう場合、学習者の心情を考えた心ある対応ができるのだろう。もちろん、学習者を傷つけるのを恐れるあまり、間違いを「間違い」と指摘しなかったり曖昧にごまかそうとしたりするのはよくないが、否定的な物言いではなく、学習者のやる気を引き出す肯定的な表現を使うようにすることが大切である。教師は常日頃自分より目下の子供を相手にしているため、日常の対等な人間関係を円滑にするための物言いをしようという意識が、一般の社会人より低いように思われる。

ものは言いよう。悪い意味にもとれますが、私にとっては前向きな意味合いを持つ言葉です。日常的な人間関係を円滑にするために不可欠なこととして、誰でも身に覚えがあるのではないのでしょうか。

例えば役所の窓口の担当者。上手な対応をする人というのは「書類が足りないので手続きできません」とは決して言いません。意識的に肯定表現を使うんです。「お急ぎですね。書類がそろえばすぐに手続きできます。お待ちしています」。これがプロです。言葉一つで相手を気持ちよく動かすことができる。

(耕論「ものは言いよう、か」 櫻井 弘 朝日新聞 2017年5月19日朝刊)

上記の引用にも書かれているように、相手の気持ちを考えたプラス思考の表現というものを、学習者に対してこそ心がけることが大切であろう。

次に、「学習者がどんなところでつまずくか、どんなところがわかりにくいかが、学習者の視点や立場から理解できることが、年齢的にも学力的にも学習者に近い学生の強みである。ベテランの教師になればなるほど、「これくらいはわかっているだろう」「これくらいはできるだろう」というレベルや要求水準が高くなっていて、現実の学習者の理解力や学力レベルまで降りていくのがむずかしくなってくる。学生たちに模擬授業をしてもらおうと、「そんなことまで説明する必要があるだろうか」と思われる箇所を取り上げることがあるが、生徒役の学生の反応を見ていると、取り上げて正解だったと納得させられることも多かった。

このように、模擬授業の実施とその振り返りは、学生にとっても教師にとっても有益なので、今後とも継続してゆきたいと思っている。

#### 参考文献

- ・『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』全国大学国語教育学会 編  
(学芸図書株式会社 2010年)
- ・『新版 中学校高等学校国語科教育法』野地潤家・湊吉正 編 (おうふう 2011年)
- ・『国語科指導法の実践と資料』大柳勇治・堀江忠道・山本伸二 編著 (双文社出版 2011年)
- ・『第二版 実践国語科教育法』町田守弘 編著 (学文社 2016年)